# Ⅳ-225　景観構造体としての土木構築物
## ― 我国の遺産の再発見を中心として ―

東京大学農学部　正　篠原　修

はじめに

景観工学が都市や地域の計画分野において「市民権」を得るためには、景観の操作方法論の確立が不可欠である。又、我々土木技術者は、土木施設が景観整備にどのような役割を果し、あるいは果してきたのかという問を避けて通ることはできない。本文は従来触れられる所の少なかった問題―実体をいかに景観的に取扱うべきかについて若干の考察を試みたものである。

1.「もの」のデザインと景観操作の相違

景観をデザインする立場から従来の研究を整理してみると、筆者を含めて次の特徴を指摘することができる。

1) 景観デザインの方法が視点の操作に偏していること。

2) 逆に、対象を景観的に扱おうとする場合に、それを実体そのもののデザインに短絡させてしまうこと。

この2つに分裂した傾向が意味する所は（実用的な）機能を持つ対象を景観的に扱う方法論の欠如である。ここで昨年発表した〈景観把握モデル ― 図1〉を手掛りに景観の操作と「もの」のデザインの本質的相違について検討してみよう。もののデザインとは、そこに要請される機能を材料・構造・コスト・施工等を勘案しながら形態を総合として計画・設計することである。景観のデザインがもののデザインと基本的に異なる点は、景観という現象が対象自身で自己完結せず、対象が置かれている場や視点との関係において始めて意味を持つことにある。図1のモデルに即して言えば、操作対象（O）の対象場や視点との関係を無視できないこと、この事実が景観という現象の特徴である。

景観のデザインには常に、それを眺める視点や全体の場との関係を意識した方法がもとめられている。極論すれば、どんなに優れた橋であってもそれが置かれる場によっては景観的に評価されない場合が起り得るのである。このような事実は我々が自然風景地や都市内でよく経験する所である。残念ながら、古くから土木構造物について言われる3つの条件―用・強・美はデザインの領域にのみ適用するものであろう。

では、対象を景観的に扱う方法論とはいかなるものか。それを明らかにするのが我々の課題である。

2. 対象の景観的操作の方法.

対象のすべてを景観的配慮のもとにデザインすることは一つの理想であろう。しかしながら、この考え方は次の2点において現実的ではない。

1) 対象とは一般に実用的機能が具体化されたものであって、景観的操作を充分に加え得るものはむしろ例外である。例えば、景観の観点から景観の状態をマクロに規定する土地利用を改変することはできない。

2) すべての対象を景観的に操作することの有効性。その操作結果が全体としての景観にほとんど影響を与え得ない対象について配慮することは冗長げているだろう。

すなわち、対象を（それ自身のデザインではなく）景観を操作・整備する観点から捉える場合には、対象個々のデザイン ―機能と形態の調整―

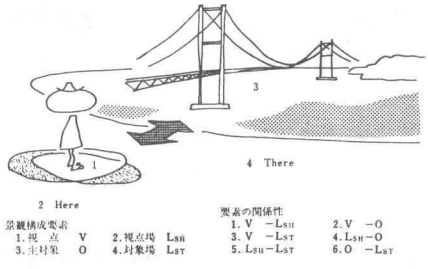



図1. 景観把握モデル

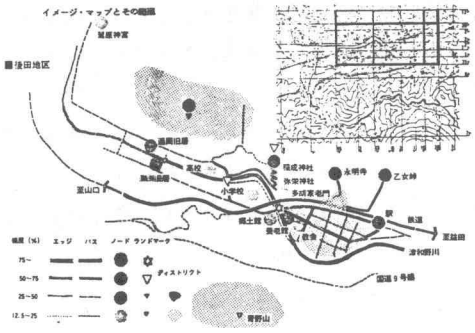



図2. イメージマップに表わされた景観構造要素

一を問題とする前に、まず全体の景観の構造を支え更に景観的操作を加え得る対象を明らかにすること。の必要性である。言い換えるなら、どのような対象に着目すれば景観をデザインし得るかということになる。

3. 景観構造体としての土木構築物

図2は住民による津知郡のイメージマップを示したものである。地域のイメージを構成する要素として土木構築物がいかに重要であるかを示す一例として掲げた。このようなある地域の景観を形づくっている主要な要素を仮に景観構造体と名づけると、景観構造体としての土木構築物には2つの役割を見ることができる。すなわち、

1) 景観を形成する諸要素を機能的に支える基盤としての役割
2) 視覚的・意味的に全体の景観を組織化・統合化する役割

前者を景観構造体としての潜在的、後者を顕在的な働きと考えることができる。一般にインフラストラクチャーと呼ばれるように、本来土木構築物とは自然の地形や水、植生と同格の構造性を備えたものである。景観的観点から見ても、人々は通路をより処として地域を認識・評価し、河川や堤防は人々の行動を規制し景観に表情を与え、その値を決定する。このような潜在的・顕在的な土木構築物の持つ景観形成力をいかに有効に活用するかが、我国の都市・地域の景観整備の鍵を握っていると言っても過言ではあるまい。

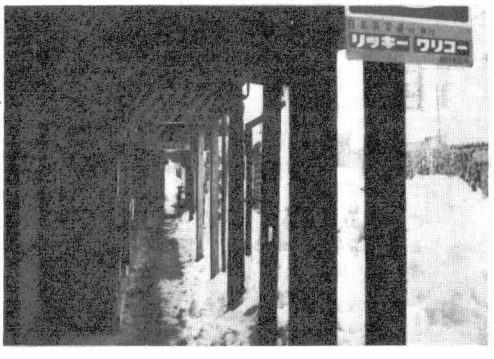
本文は、対象を景観的に操作する方法の研究の第一歩を、我国において構造要素性と操作可能性を兼ね備えていた実例の分析から始めている。実例として取上げたものはすべて一定の機能を果しつつ景観的効果を発揮している(していた)ものである。写真にその一端を紹介した。土堤と水防林で構成されていた信玄堤は、当初の水防機能を失ない公園化された現在もなおレクリエーションの場となって存続し、景観的役割を果し続けている。雪国の雁木はいまだその機能を失わず、生活の場として住民との触れ合いを保ち地域の個性を表現する要素である。東京の堀割は当初の機能を完全に失ない、その潜在力を生かされることなく殺されてしまっている。

これらの遺産の検討が我々に示唆するものは何であろうか。せっかちな結論は避けなければならない。しかし、時代を超えて生きつづけ、人々に景観の永続性・安定性を保障する鍵は実体の持つ機能の多様性と、そのポテンシャルを生かす我々技術者の叡知であろう。という点は確からしい。

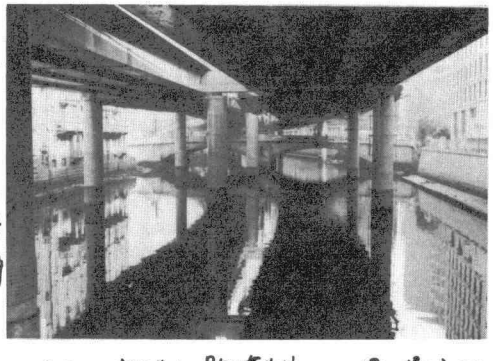
参考文献. LYNCH, K. "THE IMAGE OF THE CITY" 1960
小沢明「形成的風景」都市計画83.

信玄堤. 防災から公園への価値の変換.

仝上. 景観を視覚的・意味的に統合する働き




上越市高田の雁木. 生活空間として個性の表現として



日本橋川と高架道路. 景観構造体としての堀のポテンシャルの異用.